「特集・九州の風土とランドスケープ」

湯布院町の地域形成における住民意識の変化

猪 爪 範 子*

Research on the Changing Process of Inhabitants' Sentiments in Yufuin Town

Noriko INOZUME

1 研究の背景と目的

わが国の農村振興は、長い間生産の現場としての土地開発や都市部との格差是正をめざす基盤整備に主力を注いできた。しかし、一次産業の衰退を背景として、農村の産業構造が変化し、人々の就業の場も多様化している。また、都市と農村に地域間格差を生じさせていた交通条件や情報環境の改革によって、農村に住む人々の価値観や生活様式も、従来の枠組みをこえて捉えがたくなってきている。

かつての生産の現場としての役割に止まらず、都市は農村にさまざまな要求をするようになっている。自然やゆとりのある農村の空間は、都市に住む人々にとってかけがえのないリフレッシュ空間としての必要性を増しているし、生産性の低い土地の活用は、リゾートなどの新しいビジネスチャンスを生み出す金の卵ともなった。

時代の要請は常に性急である。地域の側に確たる取り組みの体制や手法が整わないうちに、外部資本が踏み込んでくることも希ではない。なぜなら、行政や各種団体など従来の地域の意志決定機構が、多元化する住民関係を調整する主体として成熟するには、さらなる時間を必要とするからである。

本論では、このような事態に対応する処方箋のひとつとして、いち早く変化する地域住民の意識を確認することが有効であることに着目した。具体的には、大分県湯布院町を選び、ここ20年ほどの間の地域形成の経過のなかで、地域住民はどのような考え方をもち、また変化させてきたかを追跡することにした。なにゆえ湯布院町であるかについては、首都圏を離れた九州の寒村であるために、大きな開発の動きは1970年代に近くなって始まり、事態の確認が比較的容易な点である。また、優れた景観や土地資源に恵まれているなど、資源性の高さも理由のひとつである。さらには、早くから始まった自主的な住民活動の展開を追うことによって、ひとつの出来事を多様な角度から検証することが可能である。そうした活動

の副産物ともいえる記録が、さまざまな形で資料化されているという点でも有利と考えられる。

1955年の「新市町村建設促進法」によって、由布院町と湯平村が合併して現在の湯布院町は生まれた。温泉都市として日本有数の集積をもつ別府市に隣接し、豊かな温泉資源に恵まれているにもかかわらず、1964年の九州横断道路の開設まで、この町は農業を主体とする交通不便な寒村に甘んじていた。特色は豊後富士と呼ばれる標高1,583 mの秀麗な由布岳と、それに連なるなだらかな山々の風景である。春になると火入れして、牛を放牧する牧野として育成される一帯は、畜産で生きる村の生産の場として長い間管理されていた。

定住人口は1万2千人ほどで、このところ微減傾向にある。1次、2次、3次産業の構成は1960年に56・17・27であったものが、1990年には13・12・75に変わった。大分県の郡部の町村において、最も3次産業の比率の高い町となっている。次ページに掲載した表-1は、湯布院町における主要な地域づくりの出来事を整理した年表である。地域形成の経過にみる時代の節目は、高速交通体系の整備や大型施設の建設によって土地利用の急激な転換がすすみ、それらに対する是非や賛否の意見が主な争点となってきている。¹⁾

2 研究の方法

湯布院町内の出来事とともに、表-1にまとめた住民意識調査は、ほぼ20年間に14種類を数えた。県立図書館や役場資料としても、このような調査報告書を長期間収集保管する仕組みがないため、主に過去の新聞ニュースを手がかりに検索することになった。町広報のバックナンバーも重要な情報源であるが、保存期間が短く、これも長期にさかのぼることができなかった。したがって、この期間におこなわれた調査全部を網羅したとはいいがたいが、少なくとも新聞記事として報道された調査を対象とすることはできた。

*地域総合研究所

表－１ 住民意識調査の実施時期¹⁾

年 次	湯布院町内の出来事	実施された住民意識調査
1962(S37) 1963(S38)	・湯布院町役場新築 ・厚生年金病院、町営国民宿舎完成 ・阿蘇国立公園に編入	
1964(S39)	・九州横断道路開通 ・県立青年の家開設 ・町立体育館完成	
1965(S40) 1966(S41) 1967(S42)	・全日本観光百選に入選 ・地元青年「5人の会」結成	①衛生アンケート ₂₎
1968(S43) 1969(S44) 1970(S45)	・日本体育協会「青少年スポーツセンター」完成 ・国鉄久大線無煙化 ・中小企業レクリエーションセンター「湯布院ハイツ」開業	②ライオンズクラブアンケート ₃₎
1971(S46) 1972(S47)	・「由布院の自然を守る会」発足 ・「明日の由布院を考える会」発足 ・自然環境保護条例制定	③住民意識調査 ₄₎
1973(S48)	・統合中学校発足・中央公民館完成	④商業経営実態調査 ₅₎
1974(S49)	・農振・都市計画用途地域指定 ・牛一頭牧場主運動開始	⑤花水樹アンケート ₆₎
1975(S50)	・九州中部大地震で被害 ・第1回音楽祭 ・第1回牛喰絶叫大会	⑥住民意識調査 ₇₎
1976(S51) 1977(S52)	・陸上自衛隊別府より700人移駐 ・特別用途地域「観光・レク地区」指定 ・第1回映画祭開催	⑦観光協会事業についてのアンケート ₇₎
1979(S54) 1980(S55)	・国道210号バイパス完成 ・厚生年金休養ホーム・民芸村開設	⑧高校生アンケート ₈₎
1981(S56) 1982(S57)	・量販店ユニード進出 ・国民保養温泉地に指定 ・「潤いのあるまちづくり」で自治大臣受賞	⑨小学生アンケート ₁₀₎
1983(S58) 1984(S59)	・サントリー地域文化受賞 ・モーター類似施設等建築規制条例制定 ・大型ビル建設反対運動起る	⑩住みごこちアンケート ₁₁₎
1988(S61) 1987(S62)	・「農村アメニティコンクール」最優秀受賞 ・コミュニティマート構想に着手	⑪コミュニティマートアンケート ₁₂₎
1988(S63) 1989(H 1) 1990(H 2)	・温泉保養館完成 ・県沿道景観保全地区に指定 ・九州横断高速道路湯布院別府間開通 ・「JRゆふいんの森号走る ・潤いのあるまちづくり条例制定	⑫女性アンケートその1 ₁₃₎
1991(H 3) 1993(H 4)	・台風19号で被害 ・新総合計画策定 ・大型リゾート倒産	⑬環境アンケート ₁₄₎ ⑭女性アンケートその2 ₁₅₎

注) 本文では14種類の住民意識調査を本表で標記した番号で表す。

14種類の調査を実施した主体は多様である。通常、地域においてこの種の調査を手懸けるのは、住民ニーズの把握の必要に迫られた行政当局によるものが多いが、1966年の調査①と1975年の調査⑥のみであるところが特徴といえるだろうか。やや性格は異なるが、⑧、⑨の調査は教育委員会が実施している。

湯布院町におけるこうした調査の実施主体は、個人に近い民間グループの手作り調査が多い点を特色とする。②、⑤、⑩、⑫、⑬、⑭の各調査がこれに該当する。商工会や観光協会などの産業団体の実施する調査としては③、④、⑦、⑪がある。新しく発生した問題状況をいち早く察知し、対応の遅れを憂慮する民間サイドからの、巾広く問題提起の意図が感じられる。結果の報道や経過への参画などに、地元新聞社との協力関係があることも、

こうした企画意図が反映しているものと考えられる。活動のための意識調査として個人や民間が実施しているため、経費も最小限で統計的な精度は期待できない。

反面、外部の専門機関が直接実施に関わった調査は少なく、④、⑥、⑪である。しかも、調査⑪は街頭ヒアリングや座談会による意識調査であるため、クロス集計している調査は⑥のみであり、それも属性とのクロスに止まっている。したがって、14種類の調査から精度の高い比較数値を取り出すことには限界がある。

調査の課題は、全体を通じて地域振興に関するものが大半である。しかし、教育や環境からの切り口であっても、どのように地域をつくるかとか、イメージや手法を問いかける設問が加わっているので、調査①を除く全部が地域振興分野といって無理はない。

住民意識調査を補完する意味で、同様この20年間に町内で発行された各種刊行物を集めて目を通した。いずれも刊行期間は短く、1970年代の「花水樹」¹⁶⁾から「瓦版」¹⁷⁾、「地域ビジョン」¹⁸⁾、「モンスーン」¹⁹⁾、「風の計画」²⁰⁾、「ゆふいん新聞」²¹⁾、「環境新聞」²²⁾、「湯の坪デザイン会議会報」²³⁾など、数人の民間 Opiniオン・リーダーの力量を感じさせる質の高いものがそろっている。初期の刊行物、特に11号続いた明日の由布院を考える会の機関誌「花水樹」は、地域づくりを主題とした議論をしながら、いくつかの行動計画を練りあげ実施に移している点で画期的な冊子といえる。70年代の「花水樹」の編集体制は、90年代に至ってそのまま現在6号を数える「風の計画」に引き継がれている。しかし、主題はこの町で開かれる映画祭や音楽祭につながる芸術文化部門や、環境問題へと変化している。刊行は不規則であるが、読者は日本各地に広がり、地域づくりの教科書といった位置付けを得ている。

3 町の魅力と問題点

どのような点を地域の魅力と感じるかについては、③と⑬の調査に類似の設問がある。1972年におこなわれた調査③の結果では、「温泉に恵まれている」、「自然が荒らされていない」、「都市にほどよい近さ」、「自分や親の土地がある」、「先祖から住んでいる」、「互いに助け合える」、「親類や親しい人が多い」、「職業上便利」の順で評価が高い。

ほぼ20年後に実施された調査⑬では、町外の人たちに自慢するものとして、以下のような12項目の選択肢をあげている。「温泉」、「音楽祭などのイベント」、「由布岳」、「朝霧」、「クワハウス」、「田園風景」、「有名旅館やレストラン」、「高速道路」、「300万人がくる有名観光地」、「リゾートマンション」、「全体的な雰囲気」、「個性的な店」である。結果として、高率の支持を得た項目は、上位から「温泉」、「由布岳」、「朝霧」、「田園風景」であり、その合計が全体の70%にものぼっている。

2つの調査結果をみると、温泉や自然環境を地域の魅力として認識している状況が、20年の歳月を経ても変わっていないことがわかる。その一方で、選択肢の多様化と変化が目立つ。③の調査では、8項目の選択肢のうち、半分の4項目が長い定住生活によって培われた人間関係や資産などのストックに関連している。1972年といえば、待望の九州横断道路開通からほぼ10年を経過して、観光客や資本も含めて、外部に向かって町が開かれていった初期段階にあたる。役場や町の商工会青年部の協力によって、西日本新聞社が実施した調査であるが、淡々として選択肢に、途上時代を感じる。⑬の調査は、任意で集まった町内の女性たちが、専門家の指導を受けて直接実施にあたったものであるが、12項目のうち8項目がこれまで

の地域振興の経過や成果を踏まえた独自の内容であった。この点において20年の変化は大きい。

景観に分類される選択肢は、③の調査において「自然が荒らされていない」の項目のみに止まっている。⑬の調査では温泉に続く「由布岳」、「朝霧」、「田園風景」などに景観をとらえた項目があげられ、なおかつ自慢できる要素として上位の支持を回答者である女性住民がしている。

反対に問題点を確認している調査もある。調査③では町の悪いところを聞き、調査⑩では住みにくい理由を聞いている。悪い点としては、「買物が不便」、「職業を選べない」、「都会に遠い」、「しきたりや因習が多い」、「自由にものが言えない」、「高校がない」となっている。住みにくい理由としては「不便」、「人間関係が悪い」、「公共施設が遠い」、「閉鎖的」などの項目があがっている。2つの調査は1972年と、1985年におこなわれたものであるが、前者では田舎の不便さに関する事項が続いて上位にならび、社会関係についての不満は低位であり、少なくもある。後年の調査になって、不便さを問題視する傾向は相変わらず強いものの、人間関係の悪さや、社会の閉鎖性が以前より強く意識にあることが確認される。

景観についての直接的な設問や選択肢は見られないが、自然や農耕景観に恵まれた田園から、多様な都市的施設を備えた温泉観光地へ転身する課程で、多元化する社会や錯綜する問題を複雑な思いで捉える住民の心情がしのばれる。

4 町の将来イメージ

湯布院町の将来像については、②、⑥、⑨、⑫の4調査で言及している。それぞれ1970年、1975年、1981年、1990年に実施されたもので、ほぼ5年ごとに住民意識の変化を知ることができる。

調査②は、ライオンズクラブのメンバー28人への調査であるが、将来の町の姿を21人が「周辺臨海工業都市の発展に伴い、湯布院はその静かな雰囲気をかわれ、ますます住みよい豊かな町に発展してゆく」としている。次いで6人が「周辺の都市化によって、湯布院はそのベッドタウンとなり過密化する。従って静かな仙境のイメージは壊され住みにくい町になる」。「郡部の人口の都市部流出という全国的趨勢に習って湯布院の人口は周辺都市に流出し、過疎の傾向を辿る。従って湯布院はこのままでは疲弊する」と考える人は1人であった。

町の長期計画策定を前提に実施された調査⑥では、「温泉を生かした明るい観光のまち」に最も高い回答が集まっている。次いで「公害のない工場が立ち並ぶ近代的な産業都市」、「魅力ある公園やレクリエーション施設が多くあるまち」となっている。「農林業の振興を中心とした本格的な産業都市」は、農林業従事者で最も高い支

持を得たが、他の職業や年齢などの属性では低く、そのために住民全体のイメージとしては低位になっている。

調査⑨は、小中学生へのヒアリングによるものであるが、「観光が発展すると同時に、今までの素朴なまちであってほしい」、「観光客が来ても抵抗はないが、静かなまちであってほしい」、「もっと都市化してほしい」、「観光と農業を同時に発展させ温泉を利用していく」などの意見が出ている。

調査⑫では、「西ドイツのような温泉保養地」、「緑豊かなヨーロッパの田舎町」、「森林に囲まれた町」、「北欧のような健康福祉の町」、「外国人も含め人々の交流が盛んな町」、「農業中心の町」の順位になっている。美しい自然や快適な環境などが、これら選択肢の根幹を支える基本にあることはいうまでもない。調査の企画者も対象者も地域の一般女性であるが、情報や体験の集積によって、外国の地域をわが町のイメージに違和感なく置き換えているところが注目される。

20年の間に実施された4種類の調査の設問や回答には、この間に起きたさまざまな争点や問題克服あるいは挫折の経験を読み取ることができる。たとえば、前半のほぼ10年におこなわれた調査②、⑥、⑨においては、町の将来を産業振興によって問いかけている。観光か農業かという既存産業の選択が主題であり、その延伸が、そのまま地域の将来像として提起されているところに共通点がある。後半10年間の調査である⑫は、産業振興だけでなく、福祉も将来像の根幹として読み込んでいるところが目新しい。また、観光や農業の振興にしても、環境や景観のありかた、田舎町というような表現をかりた地域の適性サイズなどにも言及している点が、前半10年には見られなかった特色といえる。

5 将来への方策

望ましい町の将来に向けて、具体的にどのような方策で臨むかについて問いかけている調査としては、②、④、⑤、⑥、⑨、⑫、⑬がある。しかし、前項で触れた将来像に関する質問に、たとえば「観光立町」のような表現があり、実現のための方策にも「観光の振興」という選択肢があるので、そうした重複感のある設問や回答を除外すると、対象は調査⑥、⑨、⑫に狭まる。

町役場が長期計画策定を目的にして1975年に実施した調査⑥では、実現の方策を次の5項目に分けて質問している。「町づくりの施策」、「魅力ある生活の場づくり」、「暮らしを豊かにするために必要なこと」、「豊かで住みよい町づくりのために必要なこと」、「均衡ある地域開発の方策」の5問である。回答に用意された選択肢はそれぞれの設問でかなりの部分重複しているため、全体を通して要望の高い内容を拾いあげたところ、以下のような内容であった。「道路や下水道が完備し、清潔で健康な

住みよい町」、「観光レジャー施設を整備し積極的な観光客の誘致をはかる」、「道路や学校や公園を整備してきちんとした町並みをつくる」、「広域行政により開発や事務をすすめ均衡ある地域開発をする」などである。

調査⑨は1981年におこなわれた小中学生への質問であるが、今後のまちづくりについて、「自然を守ろう」という答えが、「ある程度の近代化が必要」や「スーパーが欲しい」をうわまわっている。調査⑫は住みやすくしていくうえで、自分自身のできることを聞いているが、各世代に共通して、「気持ちのよいあいさつ」、「地域活動への参加」、「台所排水の処理」、「ゴミを捨てない」、「住居区域での美感」、「自分の学習」などが同程度の比率でならんでいる。円滑な人間関係に触れた項目より、身近な環境に対する個人的働きかけを必要とする項目を重視する人が多い、という結果になっている。

6 大型開発の是非

外部資本の流入に対する意見を、調査④、⑤、⑬で聞いている。1973年、1974年と連続した④と⑤の調査は、70年代に入って続発した大型資本によるトラブルを体験した後の、在住事業者の意見である。④では、大型資本の進出について、「条件によっては賛成」が過半数で、「無条件賛成」を加えると賛成を唱える人が全体の80%にのぼっている。事業者より宿泊業者に反対意見が2倍近く多い。大型資本は観光開発を目的として流入するケースが多く、直接的に影響を受ける宿泊業界がより現実的な反応を示していることがわかる。

調査⑤では、大型資本導入の効果について聞いている。導入によって「よくなる」とする回答者は22%、「よくならない」は45%であった。

1991年の調査⑬は、別府市在住の高校生と湯布院在住の一般住民を対象におこなわれた。開発の主体を外部資本と限定していないが、リゾート開発推進の是非について聞いている。「現状のままでよい」とするのは高校生で30%、「自然環境を取りもどす」が43%、「開発をもっと進める」が27%になっている。一般住民ではそれぞれ42%、53%、5%で、湯布院に住む一般住民の95%が現状を上回るリゾート開発は必要ないと考えていることが確認できる。外部資本による開発について、事業者で80%、直接利害をこうむる宿泊業者でさえ60%をこえて賛成した70年代の調査にくらべて、20年ほどの間に、95%が開発拒否の姿勢を強めていることが注目される。

7 欲しい施設や環境

調査⑥、⑫、⑭は1975年、1990年、1993年にそれぞれ実施された。

⑥の調査では「道路整備」、「子供の遊び場」、「公園」、「街灯」、「道路拡幅」、「下水道施設」などが上位にあがっ

ている。世代的には、20代が「ショッピングセンター」と「公園」、30代が「子供の遊び場」、40代と50代が「道路の整備」、60代が「道路整備」と「老人の憩いの場」を必要とする施設や環境の上位にあげている。

女性に聞いている調査⑫では、「公園」、「若い人が働ける場所」、「専門病院」、「きれいな公衆トイレ」、「快適な散歩道」などの順位で必要としているという結果が出ている。世代別では、20代と30代は「運動施設」、40代は「公園」、50代は「若い人が働ける場所」、60代は「学校」と「専門病院」が1位にあがっている。調査⑬も同様に女性を対象にして実施された最も最近の調査であるが、子供たちに必要な公共施設として、「自然公園」を各世代が選んでいる。2位が運動公園であることも世代に共通している。

調査の実施主体は、⑥の調査では網羅的に住民の意向を把握することを意図した行政であり、その他の2つの調査は、身近な生活環境の充実に関心の高い民間の女性グループによるものである。調査時点で15年の経過があるとはいえ、それぞれの調査の選択肢として列挙された内容の違いが大きい。また、道路や下水道などの生活基盤整備水準では決して先進的ではない湯布院町において、公園などの都市的な環境に対する需要が高いことも注目される。さらには、調査⑬の選択肢のひとつである自然公園の意味がわかりにくいのだが、いまもって農地や山林や牧野にとり囲まれた環境のように見えながら、なお自然あふれる公園が必要という住民の声が高い。

8 住民意識の変化と特徴

調査の精度や頻度において、必ずしも検討すべき素材が十分あったとはいえないが、取り上げた住民意識調査のなかからいくつか特記すべき事項をあげることができる。ひとつは、調査実施の時期や課題が、その時点での

問題状況をすみやかに反映していることである。表-1でも確認したように、湯布院町にとって1970年代は大型開発や外部資本によって身近な環境が変わることを住民自身が身をもって体験した時代といえる。したがって、問題の発生がまだ初期段階であるせいか、町外対町内の対立で事態をとらえている点で各調査は共通している。

2つ目は、前半10年で地域の経済的自立を問う設問が目立ったが、後半10年では環境や個性化などに触れる質問や選択肢が増えた。表-2に選択肢に含まれているキーワードを列挙したが、農業か観光か、両者の並立かというような問題提起は、1970年代に終わっている。

後半10年に登場する町のイメージは、美しいまち、自然のきれいな町などであるが、質を問う視線がこの段階で加わったことが3つ目の特色である。同時に、4つ目として住民の保守化傾向があげられる。たとえば、産業を振興して地域の自立をはかるより、身近な環境を快適に美しくすることに関心が移っている。外部資本によるリゾート開発についても、前半では条件付きも含めて賛成が多数であるが、後半になって圧倒的多数が反対している。

5つ目の特色としては、表-2でもわかるように、自然に恵まれた町とリゾート開発が、いつも質問の素材になる点である。この町に住む人々の拠り所は豊かな自然であり、それをリゾート開発が損なうのか、より豊かに変えてくれるかに揺れ動いて、現在はこれ以上の開発はいらないという結論に達している。

9 おわりに

ひとつの地域がどのように時代をとらえ、新しい事態を選択したかについて言及することは、地域振興にかかわる広範囲な推進部門において、基本的に把握しておくべき事項と考えている。なぜなら、地域を形成する当事

表-2 調査結果にみる住民意識の変化

選択肢の中のキーワード	→1971→1981→1991年→													
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
自然環境に恵まれた美しいまち			○	○					○	○	○	○	○	
温泉資源の豊かなまち			○			○						○	○	
緑豊かなヨーロッパイメージのまち						○						○	○	
公園やレクリエーション空間のあるまち						○						○	○	○
買い物など利便性の高いまち			●			○				●				
街並みの美しい素朴なまち							○				○			
人間関係が円滑で民主的なまち										●		○		
国内外の人々と交流のあるまち												○		
ベッドタウン化		○												
観光と農業併立のまち						○								
観光立町		○			○	○								
大型外部資本によるリゾート開発				○	●							●	●	
若者が働ける職場												●		
身近な生活環境の美化	●											○		
道路や下水道の整備						○								

注) 番号は表-1の住民意識調査の番号に同じ

○：上位3位以内で肯定

●：上位3位以内で否定、または問題がある

触れられていない場合は空欄

者は住民を含めて極めて多彩であり、その考え方も多岐にわたっている。したがって、結果としてあらわれた新しい風景の周辺には、経過のなかで切り捨てられたさまざまな選択肢が散らばっていると考えるべきである。長い間、例えば世代交替くらいの才月にかけて特定の地域を観察していると、成就することのなかったそれらの意志がある時蘇り、次の選択の重要な拠り所になっていることに気づく。

本論では、住民が主体となって地域づくりの活動に取り組んできた湯布院町において、過去に実施された住民意識調査を追跡する方法でその断片を確認しようとした。結果は、多様な住民を主体とした実施主体が、本来行政や専門家がおこなうべき領域まで立ち入って問題提起をしていることがわかった。また、出来事をめぐっていち早く行動を開始していることも確認できた。そしてそれらを可能にする情報が特殊に専門化していないという点で、常に学習の機会に恵まれた町であったといえる。

実践活動の情報化は、目覚めた人々のネットワークをすすめる結果ももたらしている。近年は、すでに確立した既存の団体ではない、ゆるやかな個人の結びつきによるグループが調査の実施主体として登場している。観光地といえども伝統的な農村コミュニティを主流とする湯布院町において、地縁をこえた新しいコミュニティの萌芽がみとめられるのである。この点においても、従来の地域振興の方策転換が求められるのである。

参考文献

- 1) 猪爪範子 (1994年)「湯布院町における観光地形成の課程と展望」(日本造園学会, 造園雑誌, VOL.55 NO.5 365, 社団法人日本造園学会)
- 2) 湯布院町保険衛生課 (1964年)「衛生アンケート」(大分合同新聞1964年12月21日) 国民保養温泉地づくりに向けて、全町2,847世帯に配布して42.4%から回収。質問項目18
- 3) 湯布院ライオンズクラブ広報委員会 (1970年)「アンケート集計」(狹霧, 7月号, 湯布院ライオンズクラブ) 湯布院町ライオンズクラブメンバー28人に配布して全員から回収。質問項目13
- 4) 西日本新聞 (1974年)「住民アンケート」(西日本新聞1972年7月21日) 西日本新聞の連続掲載記事の締め括りとして実施。任意に100名に配布して89名から回収。質問項目15
- 5) 中小企業庁・全国商工会連合会 (1973年)「商業経営実態調査」(小規模事業対策調査報告書—観光立地商工会地区調査—) 商業237, 宿泊業34の業者に配布してそれぞれ68.8, 85.0%を回収。質問項目11
- 6) 明日の由布院を考える会花水樹編集部 (1974年)「アンケート集計」任意に230名に配布して147名から回答。質問項目19
- 7) 日本コンサルタントグループ (1976年)「アンケート結果に見る住民意識」(調査策定報告書) 無作為抽出759名, 任意に110名配布してそれぞれ70.1%と71.8%回収。質問項目7
- 8) 由布院観光協会 (1977年)「昭和52年度観光協会事業についてのアンケート調査報告」観光協会会員および町内各種団体ならびに役員個人270に配布して10%から回収, 質問項目は記入式で14
- 9) 湯布院町教育委員会 (1979年)「高校生アンケート」(西日本新聞社1979年10月24日) 予備調査として37名に配布して全員回収。質問項目4
- 10) 湯布院町 (1981年)「小中学生に聞く町づくり」(湯布院町広報紙) 小中学校ともに1クラス各38名づつに実施, 質問項目4
- 11) 由布院塾 (1985年)「住み心地アンケート」無作為抽出で1,400名に配布して35%回収。質問項目3
- 12) 湯布院町商工会 (1987年)「消費者動向調査」(コミュニティマート報告書) 来街者街頭聞き取り調査を2回実施して557票を回収。宿泊客意向調査は宿泊施設に調査票を置いて記入してもらって389票を回収, 別荘客意向調査は主な別荘100に郵送して48票を回収。地元住民からみた現況と課題調査は若者と小学生の座談会を実施
- 13) 女性フォーラム実行委員会 (1991年)「こだわりのふるさとでいまー湯布院の女性100人に聞きました」町内在住の20~60代の女性100名に配布し全員から回収。質問項目10
- 14) 大分婦人協会大分支部 (1992年)「環境アンケート」別府市羽室台高校786名と湯布院町民334名。
- 15) 女性フォーラム実行委員会 (1993年)「ゆふいん女性アンケート」町内在住の20~70代の女性143名に任意に配布して全員から回収。質問項目21名
- 16) 明日のゆふいんを考える会 (1970年)「花水樹」
- 17) 由布院温泉観光協会 (1978年)「瓦版」
- 18) 湯布院町商工会 (1983年)「地域ビジョン」
- 19) モンスーン社 (1988年)「モンスーン」
- 20) 湯布院企画室 (1988年~)「風の計画」
- 21) 湯布院企画室 (1990年)「ゆふいん新聞」
- 22) ゆふいんの自然と環境を考える会 (1992年~)「ゆふいん環境新聞新・花水樹」
- 23) 湯の坪デザイン会議 (1990年~)「湯の坪デザイン会議会報」